

宇土市埋蔵文化財調査報告書第37集

轟貝塚Ⅲ

— 平成23～30年度市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査報告 —

2021

熊本県宇土市教育委員会

轟 貝 塚 III

— 平成23～30年度市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査報告 —

2 0 2 1

熊本県宇土市教育委員会



轟貝塚遠景（南西から 写真奥は熊本平野）



轟貝塚近景（西から 写真奥は西岡台丘陵）

卷頭図版 2



貝層・焼土坑検出状況（12次調査4T南東壁 土坑は4T SK01）



6次調査1号土壙墓再検出状況



集石検出状況（12次調査3T）



人骨検出状況（13次調査8T 5号人骨）

卷頭図版 4



出土遺物（土器）



出土遺物（石器・石製品・貝製品）

序 文

宇土市を含む有明海沿岸には、その豊かな生物資源を背景に、貝塚をはじめとした縄文時代の遺跡が多数残されています。なかでも轟貝塚は、古くから世に知られ、今日著名な数々の研究者により調査が行われてきた歴史を持ちます。九州の縄文時代前期を代表する轟式土器の標式遺跡であることは、当貝塚の学問上・学史上の重要性を如実に物語っています。

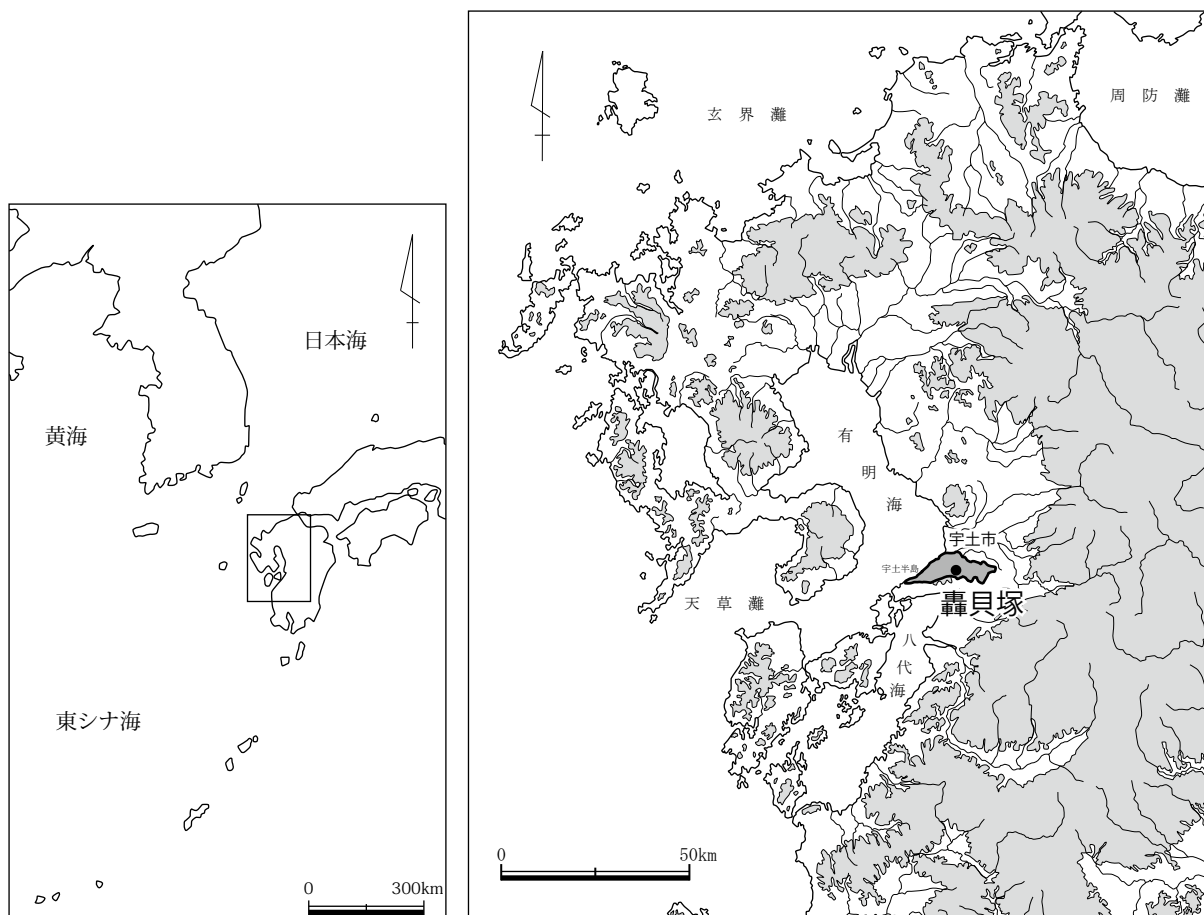
轟貝塚は昭和33年に宇土町（当時）の史跡に指定され、教育委員会ではこれまでに範囲確認調査や過去に大学等が行った調査資料の再整理等を実施してきました。本書は、それに続く貝塚周辺発掘調査及び貝塚中心部の発掘調査、貝塚周辺の低地部分に対して実施したボーリング調査等の成果を集約し、貝塚をはじめとした遺跡全体の理解に資することを目的として刊行するものです。

本書が考古学の研究者のみならず、広く市民一般の目に触れ、地域の宝である轟貝塚について、より一層の理解と愛着を育てる一助になることを強く願います。

最後に、本書の執筆・編集においては多くの方々に御指導・御助言をいただきました。その全てをここに著すことはできませんが、記して感謝を申し上げます。

令和3年3月

宇土市教育長 太田 耕幸



轟貝塚の位置 (左：1/20,000,000 右：1/2,000,000)

例 言

- 1 本書は、熊本県宇土市宮庄町に所在する宇土市指定史跡・轟貝塚において平成23～28年度に行った発掘調査及び、平成30年度に行った地質調査の成果をまとめた調査報告書である。当事業は、宇土市内遺跡発掘調査等事業（国庫補助事業）に伴い宇土市教育委員会が実施した。
- 2 調査地は宇土市宮庄町字居屋敷、須崎、及び石橋町に所在する。
- 3 発掘調査は芥川博士（宇土市教育委員会文化課）が担当し、地質調査は八洲開発株式会社に業務委託して実施した。また、発掘調査に伴う年代測定及び火山灰分析は株式会社古環境研究所・古環境研究センターに業務委託して実施し、第6章に記す自然遺物（貝類・脊椎動物骨・植物遺体）についてはそれぞれ黒住耐二（千葉県立中央博物館）・樋泉岳二（早稲田大学）・高宮広土（鹿児島大学）に分析・執筆を依頼した。
- 4 本書に掲載した遺構実測図及び遺物の拓本・実測図等の作成は山口陽子、廣瀬恵子、中川ゆかり、内田美和、中村マナミ、江東出、上田友子（宇土市非常勤職員）、秦翔平、松浦正朋、竹村南洋（熊本大学学生）及び芥川が行った。ただし、平成27・28年度調査における出土人骨の実測・取り上げについてはNPO法人人類学研究機構に委託し、松下孝幸・松下真実が図面の作成を行った。両名には、人骨に関する所見についても執筆を依頼し、これを第4章に掲載した。
- 5 発掘調査写真及び遺物写真は芥川が撮影した。
- 6 本書の挿図で用いたレベルは海拔標高であり、平面直角座標及び方位は世界測地系を使用している。
- 7 本書の執筆・編集は、市で実施した発掘調査については芥川が、過去に大学等が行った調査（学史）のまとめは藤本貴仁（宇土市教育委員会文化課文化係長）が中心となって行った。また、学史を補完するものとして既刊行の論文・報告書の再録を行った他、熊本大学が保管する昭和33年調査（轟貝塚第5次調査）の出土遺物については廣重知樹（熊本大学大学院生）が内容をまとめた。
- 8 本文註は各章末に掲載し、参考文献は第8章の末尾に一括して掲載した。ただし、外部に執筆を依頼したものについては、各文末に掲載した。
- 9 出土遺物と関連記録は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

本文目次

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 事業の経過と組織	1
第3節 遺跡の地理的環境	4
第4節 遺跡の歴史的環境	5
第2章 轟貝塚の発掘調査史	9
第1節 発掘調査史の概要	9
第2節 明治期の報告	11
第3節 大正期の発掘調査	12
第4節 昭和期の発掘調査	23
第5節 平成期の発掘調査	34
第6節 まとめ	36
第3章 貝塚周辺微高地部の調査（轟貝塚第9～11次調査）	41
第1節 調査の概要	41
第2節 調査の成果	43
第3節 小結	64
第4章 貝塚中心部の調査（轟貝塚第12・13次調査）	73
第1節 調査の概要	73
第2節 層序	94
第3節 遺構	99
第4節 出土遺物	102
第5節 出土人骨	247
第5章 貝塚周辺低地部の状況	285
第1節 周辺地形と西岡台貝塚	285
第2節 貝塚周辺ボーリング調査	285
第6章 自然遺物	289
第1節 資料（試料）の概要	289
第2節 轟貝塚から得られた貝類遺体	290
第3節 轟貝塚第12～13次調査で採集された脊椎動物遺体	306
第4節 轟貝塚第12次調査4 T SK01出土の植物遺体	333
第7章 自然科学分析	335
第1節 放射性炭素年代測定	335
第2節 火山灰分析	337
【付論1】 轟貝塚出土人骨の自然科学分析	344
【付論2】 轟貝塚出土土器の放射性炭素年代測定分析報告	350
第8章 総括	353
第1節 轟貝塚を構成する要素	353
第2節 遺跡の範囲	362

第3節 遺跡の変遷	363
第4節 轟貝塚の本質的価値について	375
付編 1	383
1 轟貝塚出土資料の所蔵及び保管状況等について	387
2 轟貝塚第1次・2次調査出土資料（京都大学資料）について	388
3 轟貝塚第3次調査出土資料（京都大学，東京大学資料）について	391
4 轟貝塚第5次調査出土資料（熊本大学資料）について	400
5 轟貝塚第6次調査出土資料（長崎大学資料，旧慶應義塾大学資料）について	424
付編 2	441
1 佐藤傳藏 1899「九州に於ける石器時代人民」『地学雑誌』11巻1号 東京地学協会	443
2 鈴木文太郎 1918「河内国府肥後轟貝塚等にて発掘せる人骨に就て報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」 『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊	445
3 濱田耕作・榊原政職・清野謙次 1920『肥後轟貝塚発掘報告』京都帝国大学文学部考古学研究報告第5冊	455

挿図目次

第1図 轟貝塚の位置	3	第17図 轟貝塚第6次調査出土縄文土器分類図	32
第2図 轟貝塚周辺遺跡地図	3	2	
第3図 熊本県縄文時代貝塚分布図	7	第18図 轟貝塚第7・8次調査トレンチ配置図	34
第4図 宇土半島基部地域の縄文時代貝塚	8	1	
第5図 鈴木文太郎らの調査を伝える新聞記事	13	第19図 轟貝塚第7・8次調査トレンチ配置図	35
事		2	
第6図 轟貝塚所在地図	15	第20図 第9～11次調査位置図	41
第7図 調査区配置図と出土人骨の位置	16	第21図 9次調査第1トレンチ遺構実測図・土層断面図	44
第8図 轟貝塚第2次調査VI区人骨出土状況図	18	第22図 9次調査第1トレンチ出土土器	45
第9図 京都帝大の轟貝塚発掘調査（第2次調査）を伝える新聞記事	19	第23図 9次調査第2トレンチ遺構実測図・土層断面図	47
第10図 東北帝大による轟貝塚発掘調査（第3次調査）時に作成された調査区配置図と出土遺物等の記録	22	第24図 9次調査第2トレンチ SK01 獣骨検出状況	48
第11図 鳥居龍藏による轟貝塚の発掘調査（第4次調査）を伝える新聞記事	24	第25図 9次調査第2トレンチ 1～5層出土土器	49
第12図 轟貝塚第5次調査トレンチ配置図	25	第26図 9次調査第2トレンチ 6層出土土器 1	50
第13図 轟貝塚の発掘調査（第5次調査）を伝える新聞記事	26	第27図 9次調査第2トレンチ遺構内出土土器	51
第14図 轟貝塚第6次調査トレンチ配置図	29	第28図 10次調査第3トレンチ平面図・北壁土層断面図	52
第15図 轟貝塚第6次調査トレンチ基本層序	29	第29図 10次調査第3トレンチ出土土器	53
第16図 轟貝塚第6次調査出土縄文土器分類図 1	31		

第30図	10次調査第4トレンチ遺構実測図・・	54	第56図	第8トレンチ(8T)層位別遺構検出 状況2	97
第31図	10次調査第4トレンチ北壁土層断面及 び遺構断面図.....	55	第57図	第12・13次調査基本層序及び過去の調 査との比較.....	98
第32図	10次調査第4トレンチ出土土器	56	第58図	出土土器分類図1	104
第33図	10次調査第5トレンチ遺構実測図・西 壁土層断面図.....	58	第59図	出土土器分類図2	105
第34図	10次調査第5トレンチ出土土器・土製 品1	59	第60図	1T I・II層出土土器1	109
第35図	10次調査第5トレンチ出土土器・土製 品2	60	第61図	1T I・II層出土土器2	111
第36図	11次調査第6トレンチ遺構実測図・北 壁土層断面図.....	62	第62図	1T I・II層出土土器3	112
第37図	11次調査第7トレンチ平面図・北壁土 層断面図.....	63	第63図	1T I・II層出土土器4	113
第38図	11次調査第7トレンチ出土土器	64	第64図	1T III a・IV a層出土土器	114
第39図	9～11次調査出土石器・石製品.....	66	第65図	2T I・II層出土土器1	115
第40図	第12次・13次調査位置図.....	74	第66図	2T I・II層出土土器2	116
第41図	第1トレンチ(1T)平面図.....	78	第67図	3T I・II層出土土器1	118
第42図	第2トレンチ(2T)平面図・・	79・80	第68図	3T I・II層出土土器2	119
第43図	第1・第2トレンチ(1T・2T)土 層断面図.....	81	第69図	3T I・II層出土土器3	120
第44図	第3トレンチ(3T)II層中検出遺構・	83	第70図	3T I・II層出土土器4	121
第45図	第3トレンチ(3T)IV a層 遺構・ 礫群検出状況.....	84	第71図	3T III a層出土土器	122
第46図	第3トレンチ(3T)IV b層 人骨出 土位置.....	85	第72図	3T III b層出土土器	123
第47図	第3トレンチ(3T)土層断面図・・	86	第73図	3T IV a層出土土器1	125
第48図	第4トレンチ(4T)平面図.....	88	第74図	3T IV a層出土土器2	126
第49図	第4トレンチ(4T)土層断面図・・	89	第75図	3T IV a層出土土器3	127
第50図	第5トレンチ(5T)平面図.....	90	第76図	3T IV a層出土土器4	128
第51図	第5トレンチ(5T)土層断面図・・	91	第77図	3T IV a層出土土器5	129
第52図	第6トレンチ(6T)平面図・土層断 面図.....	92	第78図	3T IV b層出土土器	130
第53図	第7トレンチ(7T)平面図・断面図・	93	第79図	4T I・II層出土土器1	131
第54図	第8トレンチ(8T)土層断面図・遺 構断面図.....	95	第80図	4T I・II層出土土器2	132
第55図	第8トレンチ(8T)層位別遺構検出 状況1	96	第81図	4T III a・III b層出土土器	133
			第82図	4T IV a層出土土器1	135
			第83図	4T IV a層出土土器2	136
			第84図	4T IV a層出土土器3	137
			第85図	4T IV b層・SK01・SP01出土土器・・	138
			第86図	5T I～III a層出土土器	138
			第87図	5T III b層出土土器	139
			第88図	5T IV a層出土土器1	141
			第89図	5T IV a層出土土器2・IV b層出土土 器	142
			第90図	6T出土土器.....	143
			第91図	7T出土土器.....	144
			第92図	8T I・II層出土土器	144

第93 図	8 T III a 層出土土器 1	145	器	188
第94 図	8 T III a 層出土土器 2	146	第132 図	4 T I・II 層・III b 層出土石器・石製品
第95 図	8 T III b 層出土土器 1	148	第133 図	4 T IV a 層出土石器 1
第96 図	8 T III b 層出土土器 2	149	第134 図	4 T IV a 層出土石器 2・V 層・SK01 出土石器
第97 図	8 T III b 層出土土器 3	150	第135 図	5 T I・II 層・III b 層出土石器
第98 図	8 T III b 層出土土器 4	151	第136 図	5 T IV a 層出土石器
第99 図	8 T III b 層出土土器 5	152	第137 図	6 T 出土石器
第100 図	8 T III b 層出土土器 6	153	第138 図	8 T III a 層出土石器
第101 図	8 T IV a 層出土土器 1	155	第139 図	8 T III b 層出土石器 1
第102 図	8 T IV a 層出土土器 2	156	第140 図	8 T III b 層出土石器 2
第103 図	8 T IV a 層出土土器 3	157	第141 図	8 T III b 層出土石器 3
第104 図	8 T IV a 層出土土器 4	158	第142 図	8 T IV a 層出土石器 1
第105 図	8 T IV a 層出土土器 5	159	第143 図	8 T IV a 層出土石器 2
第106 図	8 T IV a 層出土土器 6	160	第144 図	8 T IV a 層出土石器 3
第107 図	8 T IV a 層出土土器 7	161	第145 図	8 T IV b 層・VI 層・遺構内出土石器
第108 図	8 T IV a 層出土土器 8	162	第146 図	トレンチ外表採石器
第109 図	8 T IV a 層出土土器 9	163	第147 図	骨角・貝製品 1
第110 図	8 T IV a 層出土土器 10	164	第148 図	骨角・貝製品 2
第111 図	8 T IV b 層出土土器 1	165	第149 図	骨角・貝製品 3
第112 図	8 T IV b 層出土土器 2	166	第150 図	ボーリング調査位置図
第113 図	8 T IV b 層出土土器 3	167	第151 図	ボーリング調査結果
第114 図	8 T V 層出土土器	168	第152 図	土層・貝層サンプル採取位置
第115 図	8 T VI 層・SK01 出土土器	169	第153 図	自然科学分析 試料採取位置 1
第116 図	8 T SK02 出土土器 1	170	第154 図	自然科学分析 試料採取位置 2
第117 図	8 T SK02 出土土器 2	171	第155 図	テフラ分析結果
第118 図	8 T SK03 出土土器	172	第156 図	テフラ写真
第119 図	8 T ST01 出土土器	173	第157 図	貝層の推定堆積範囲
第120 図	1 T I・II 層出土石器 1	176	第158 図	轟貝塚発掘調査出土人骨地点
第121 図	1 T I・II 層出土石器 2	177	第159 図	調査区別 出土土器型式 1
第122 図	2 T I・II 層出土石器	178	第160 図	調査区別 出土土器型式 2
第123 図	3 T I・II 層出土石器 1	179	第161 図	調査区別 出土土器型式 3
第124 図	3 T I・II 層出土石器 2	180	第162 図	調査区別 出土土器型式 4
第125 図	3 T I・II 層出土石器 3	181	第163 図	第12・13 次調査 層位別石器出土数
第126 図	3 T III b 層出土石器・IV a 層出土石器 1	183	第164 図	轟貝塚 時期別遺構分布 1
第127 図	3 T IV a 層出土石器 2	184	第165 図	轟貝塚 時期別遺構分布 2
第128 図	3 T IV a 層出土石器 3	185	第166 図	轟貝塚 時期別遺構分布 3
第129 図	3 T IV a 層出土石器 4	186		
第130 図	3 T IV a 層出土石器 5	187		
第131 図	3 T IV a 層出土石器 6・IV b 層出土石器	188		

表目次

第 1 表 轟貝塚発掘調査年表 …………… 10	品観察表 13 …………… 223
第 2 表 轟貝塚第 9～11 次調査出土土器・土製品観察表 1 …………… 67	第 21 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 14 …………… 224
第 3 表 轟貝塚第 9～11 次調査出土土器・土製品観察表 2 …………… 68	第 22 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 15 …………… 225
第 4 表 轟貝塚第 9～11 次調査出土土器・土製品観察表 3 …………… 69	第 23 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 16 …………… 226
第 5 表 轟貝塚第 9～11 次調査出土土器・土製品観察表 4 …………… 70	第 24 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 17 …………… 227
第 6 表 轟貝塚第 9～11 次調査出土土器・土製品観察表 5 …………… 71	第 25 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 18 …………… 228
第 7 表 轟貝塚第 9～11 次調査出土遺物（石器・石製品・土製品）観察表 …………… 72	第 26 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 19 …………… 229
第 8 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 1 …………… 211	第 27 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 20 …………… 230
第 9 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 2 …………… 212	第 28 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 21 …………… 231
第 10 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 3 …………… 213	第 29 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 22 …………… 232
第 11 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 4 …………… 214	第 30 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 23 …………… 233
第 12 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 5 …………… 215	第 31 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 24 …………… 234
第 13 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 6 …………… 216	第 32 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 25 …………… 235
第 14 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 7 …………… 217	第 33 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 26 …………… 236
第 15 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 8 …………… 218	第 34 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 27 …………… 237
第 16 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 9 …………… 219	第 35 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土遺物（石器・石製品・土製品・骨角器・貝製品）観察表 1 …………… 238
第 17 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 10 …………… 220	第 36 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土遺物（石器・石製品・土製品・骨角器・貝製品）観察表 2 …………… 239
第 18 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 11 …………… 221	第 37 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土遺物（石器・石製品・土製品・骨角器・貝製品）観察表 3 …………… 240
第 19 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 12 …………… 222	
第 20 表 轟貝塚第 12・13 次調査出土土器・土製品観察表 13 …………… 223	

第 38 表	轟貝塚第 12・13 次調査出土遺物（石器・石製品・土製品・骨角器・貝製品）観察表 4	241	第 41 表	轟貝塚第 12・13 次調査包含層出土石器分類別集計表	245・246
第 39 表	轟貝塚第 12・13 次調査遺構出土土器分類別集計表	242	第 42 表	年代測定試料一覧	336
第 40 表	轟貝塚第 12・13 次調査包含層出土土器分類別集計表	243・244	第 43 表	年代測定結果	336
			第 44 表	轟貝塚出土人骨一覧	359
			第 45 表	轟貝塚出土人骨炭素年代測定データ（年代順）	361

写真目次

写真 1	轟貝塚第 2 次調査 VI 区人骨出土状況図	17
写真 2	東北帝大の発掘調査（第 3 次調査）に伴い作成された調査区配置図	21
写真 3	轟貝塚第 6 次調査状況遠景	30
写真 4	1 号土壙墓（1 号人骨）	30

図版目次

巻頭図版 1	轟貝塚遠景 轟貝塚近景	13 次調査 8 T IV a 層集石検出状況 12 次調査 2 T IV b 層集石検出状況
巻頭図版 2	貝層・焼土坑検出状況 6 次調査 1 号土壙墓再検出状況	図版 6
巻頭図版 3	集石検出状況 人骨検出状況	12 次調査 3 T 拡張部 3 号人骨全身 検出状況
巻頭図版 4	出土遺物	13 次調査 8 T 5 号人骨検出状況
図版 1	9 次調査 1 T SK01 完掘状況 9 次調査 1 T 完掘状況 10 次調査 3 T 貝層検出状況	図版 7
図版 2	12 次調査 4 T 付近調査前状況 12 次調査 1 T 貝層検出状況 12 次調査 2 T 貝層検出状況	図版 8
図版 3	12 次調査 7 T 貝層検出状況 12 次調査 2 T 土層断面 12 次調査 5 T 2 次調査 X 区検出状況	図版 9
図版 4	12 次調査 4 T 貝層・焼土坑検出状況 13 次調査 8 T 北壁土層中 貝殻廃棄土坑（SK02）検出状況 12 次調査 3 T IV a 層 集石検出状況	図版 10
図版 5	12 次調査 3 T・5 T IV a 層集石検出状況	図版 11
		10 次調査第 3 トレンチ出土土器
		図版 12
		10 次調査第 4 トレンチ出土土器
		図版 13
		10 次調査第 5 トレンチ 2～3 層・SP・SK01 出土土器
		図版 14
		10 次調査第 5 トレンチ 遺構内出土土器・土製品 11 次調査第 7 トレンチ出土土器

- 図版 15 9～11次調査出土石器・石製品
 図版 16 12次調査1 T I～II層出土土器 (1)
 図版 17 12次調査1 T I～II層出土土器 (2)
 図版 18 12次調査1 T I～II層出土土器 (3)
 図版 19 12次調査1 T I～II層出土土器 (4)
 12次調査1 T III a・IV a層出土土器
 図版 20 12次調査2 T I～II層出土土器 (1)
 図版 21 12次調査2 T I～II層出土土器 (2)
 図版 22 12次調査3 T I～II層出土土器 (1)
 図版 23 12次調査3 T I～II層出土土器 (2)
 図版 24 12次調査3 T I～II層出土土器 (3)
 図版 25 12次調査3 T III a層出土土器
 12次調査3 T III b層出土土器
 図版 26 12次調査3 T IV a層出土土器 (1)
 図版 27 12次調査3 T IV a層出土土器 (2)
 図版 28 12次調査3 T IV a層出土土器 (3)
 図版 29 12次調査3 T IV a層出土土器 (4)
 12次調査3 T IV b層出土土器
 図版 30 12次調査4 T I～II層出土土器 (1)
 図版 31 12次調査4 T I～II層出土土器 (2)
 12次調査4 T III a層出土土器
 12次調査4 T III b層出土土器
 図版 32 12次調査4 T IV a層出土土器 (1)
 図版 33 12次調査4 T IV a層出土土器 (2)
 図版 34 12次調査4 T IV a層出土土器 (3)
 12次調査4 T IV b層出土土器
 12次調査4 T SK01出土土器
 12次調査4 T SP01出土土器
 図版 35 12次調査5 T I～II層・III a層出土土器
 12次調査5 T III b層出土土器
 図版 36 12次調査5 T IV a層出土土器 (1)
 図版 37 12次調査5 T IV a層 (2)・IV b層出土土器
 12次調査6 T出土土器
 図版 38 12次調査7 T出土土器
 13次調査8 T I～II層出土土器
 図版 39 13次調査8 T III a層出土土器
 図版 40 13次調査8 T III b層出土土器 (1)
 図版 41 13次調査8 T III b層出土土器 (2)
 図版 42 13次調査8 T III b層出土土器 (3)
 図版 43 13次調査8 T III b層出土土器 (4)
 13次調査8 T IV a層出土土器 (1)
 図版 44 13次調査8 T IV a層出土土器 (2)
 図版 45 13次調査8 T IV a層出土土器 (3)
 図版 46 13次調査8 T IV a層出土土器 (4)
 図版 47 13次調査8 T IV a層出土土器 (5)
 図版 48 13次調査8 T IV a層出土土器 (6)
 図版 49 13次調査8 T IV a層出土土器 (7)
 図版 50 13次調査8 T IV a層出土土器 (8)
 13次調査8 T IV b層出土土器 (1)
 図版 51 13次調査8 T IV b層出土土器 (2)
 図版 52 13次調査8 T IV b層出土土器 (3)
 13次調査8 T V層出土土器
 図版 53 13次調査8 T VI層出土土器
 13次調査8 T SK01出土土器
 13次調査8 T SK02出土土器 (1)
 図版 54 13次調査8 T SK02出土土器 (2)
 13次調査8 T SK03出土土器
 図版 55 13次調査8 T SK01出土土器
 図版 56 12次調査1 T I～II層出土石器
 12次調査2 T I～II層出土石器 (1)
 図版 57 12次調査2 T I～II層出土石器 (2)
 12次調査3 T I～II層出土石器 (1)
 図版 58 12次調査3 T I～II層出土石器 (2)
 12次調査3 T III b層出土石器
 12次調査3 T IV a層出土石器 (1)
 図版 59 12次調査3 T IV a層出土石器 (2)
 図版 60 12次調査3 T IV a層出土石器 (3)
 図版 61 12次調査3 T IV a層出土石器 (4)
 12次調査3 T IV a層出土石器製品
 12次調査3 T IV b層出土石器
 12次調査4 T I～II層出土石器・
 石製品
 12次調査4 T III b層出土石器製品
 図版 62 12次調査4 T IV a層出土石器
 12次調査4 T V層出土石器
 12次調査4 T SK01出土石器
 図版 63 12次調査5 T I～II層・III b層出土
 石器・石製品
 12次調査5 T IV a層出土石器・石製品
 図版 64 12次調査6 T出土石器

- 13次調査8 TⅢ a層出土石器
13次調査8 TⅢ b層出土石器 (1)
図版 65 13次調査8 TⅢ b層出土石器 (2)
13次調査8 TⅣ a層出土石器 (1)
図版 66 13次調査8 TⅣ a層出土石器 (2)
図版 67 13次調査8 TⅣ b層出土石器
13次調査8 TⅥ層出土石器
13次調査8 T SK02 出土石器
13次調査8 T ST01 出土石器
トレンチ外表採石器
図版 68 骨角・貝製品

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯

宇土市宮庄町に所在する轟貝塚は、縄文時代早期末～前期に位置づけられる轟式土器の標式遺跡として知られる。第2章で述べるように、ここでは大正から昭和期にかけて複数の大学や研究者によって発掘調査が行われるなど、早くから学会に注目されてきた歴史を持つ。過去に行われた発掘調査の結果、縄文時代から中世にかけての土器・石器・骨角器・貝製品や人骨等、多くの遺物が出土し、それらの多くは調査主体の大学等に持ち帰り保管されてきた。

その内、昭和41（1966）年に慶應義塾大学の江坂輝彌を団長として行われた調査（轟貝塚第6次調査）の出土遺物は、他の例と同様に、長らく東京の慶應義塾大学構内で保管されてきたが、平成13（2001）年度に宇土市に仮移管され、平成19（2007）年度に宇土市で行った再整理報告書（宇土市教育委員会2008）の刊行を経て、平成23（2011）年度と26（2014）年度に分けて正式に宇土市に移管された。今後、遺跡の所在地である宇土市での活用が期待される。

一方、轟貝塚そのものは昭和33（1958）年に宇土町（当時）の史跡に指定され、恒久的に守るべき遺跡として公的に位置づけられた。しかし、何度も発掘調査が行われてきた反面、貝塚の形成に伴う居住域の位置や、それを含む遺跡全体の規模とその変遷等、基礎的な情報が不明瞭であった。そのため、本来は開発行為等から遺跡を保護するための市史跡指定が十分に機能していると言い難く、遺跡周辺における新興住宅の拡大をはじめ、開発行為により遺跡が破壊される危険が常にある。

このような状況に対し、宇土市では轟貝塚の範囲や変遷等の実態把握を早急に行う必要があるとみて、平成15（2003）年度に貝塚中心部の測量調査を、平成16～17（2004～2005）年度に範囲確認を目的としたトレンチ調査を実施し、報告書を刊行した（宇土市教育委員会2006）。本書に掲載した各調査は、これらの調査に続いて遺跡の更なる実態把握を目的に実施したものである。

調査内容は、貝塚周辺微高地部における範囲確認調査、貝塚中心部における堆積状況等の確認を目的とした調査、貝塚周辺低地部の状況確認調査の3つに分けられ、本書ではそれぞれの調査内容を第3章～第5章に記す。また、貝塚中心部に対して行った調査を補完する項目として、出土した自然遺物の検討及び自然科学分析の結果について第6章・第7章に記す。

その他、直接の調査成果とは別に、過去の調査における出土遺物や人骨資料について、現在の所在や保管状況、資料の内容等に関する確認結果を付編1として、轟貝塚の学史を理解する上で重要と思われる論文・報告の再録を付編2として報告・掲載する。

第2節 事業の経過と組織

（1）事業の経過

本書は平成13（2001）年度より国庫補助を受けて実施してきた「宇土市内遺跡発掘調査等事業」のうち、平成23～30（2011～2018）年度に実施した各調査の成果について報告するものである。以下に、簡単ではあるが事業の経過をまとめる。

平成13（2001）年度の事業開始当初には、第1節でも触れたとおり、昭和41（1966）年に慶應義塾大学を中心として行われた第6次調査の出土遺物や関係資料を宇土市に仮移管し、未報告であったこれらの資料について報告書刊行に向けた整理作業を実施した。くり返すが、これについてはその後、平成19（2007）年度

の報告書刊行を経て、平成23・26（2011・2014）年度に正式に宇土市に移管された。

轟貝塚の現地においては、平成15(2003)年度に貝塚中心部の測量を行い、続く平成16・17（2004・2005）年度に遺跡の範囲確認を目的としたトレンチ調査(轟貝塚第7・8次調査)を実施した。調査の結果、貝層の堆積範囲を北西～南東約120m、北東～南西約60mの範囲と推定した。これらの調査については平成16(2004)年度に概要報告書を、翌17（2005）年度に正式な調査報告書を刊行している（宇土市教育委員会2005・2006）。

続いて、貝層の形成に伴って付近に存在したとみられる居住域の特定を主目的に、貝塚北西側微高地部を対象に実施したのが、平成23～25（2011～2013）年度の轟貝塚第9～11次調査である。詳細については第3章に譲るが、調査の結果、貝塚に関係する縄文時代の遺構・遺物はほとんど検出されず、調査対象とした微高地部に縄文時代の集落跡が広く展開する事実は無いと判断された。なお、この間の平成24（2012）年度に、事業全体の方針や調査成果等について学術的見地から審議する「宇土市重要遺跡保存活用検討委員会」を組織した。これ以降の事業は全て委員会の指導・助言を受けて実施した。

第9～11次調査の結果、貝塚周辺部では縄文時代の遺構や遺物包含層がほとんど存在しないことがわかり、調査の方針を変える必要があった。これについて平成26（2014）年3月に検討委員会で審議した結果、調査対象を貝塚中心部に遷し、昭和期までの調査成果だけでは不明瞭な部分も多い貝塚中心部の堆積状況や、そこに含まれる遺物、ひいては貝層の形成時期等について詳細を明らかにするための調査を実施することとした（轟貝塚第12・13次調査）。過去の発掘調査地点の再発掘を基本としたこの調査は、平成26（2014）年度～28（2016）年度に及び、貝層の時期やそれ以前の生活痕跡等について多くの発見があった。これについては第4章及び第6・7章で示すとおりである。

貝塚周辺微高地、貝塚中心部の調査に続き、それまでに調査事例の少ない貝塚周辺低地部について検討するために行ったのが、平成30（2018）年度のボーリング調査である。貝塚の東方約50mに位置する西岡台貝塚との間の谷部について、谷の深さをはじめとした旧地形の復元を主目的に2個所の調査を行った。詳細は第5章で述べる。

以上、平成23～30（2011～2018）年度の調査を本書にまとめる傍ら、轟貝塚において大正期から行われてきた各発掘調査に関して、出土遺物・人骨をはじめとした資料の所在や保管状況等を確認するための資料調査も並行して行った。その結果、多くの調査資料は主体となった大学等により良好に保管されており、従来所在不明とされてきた一部の資料についても、その一端を確認することができた。詳細は付編1で示す。

（2）組織

（1）で示した事業の経過に対し、平成19（2007）年度までの組織は既刊の報告書で示している。よって、ここでは、平成23～30（2011～2018）年度の発掘調査・ボーリング調査と、その後の資料整理・報告書編集に係る組織を示す。

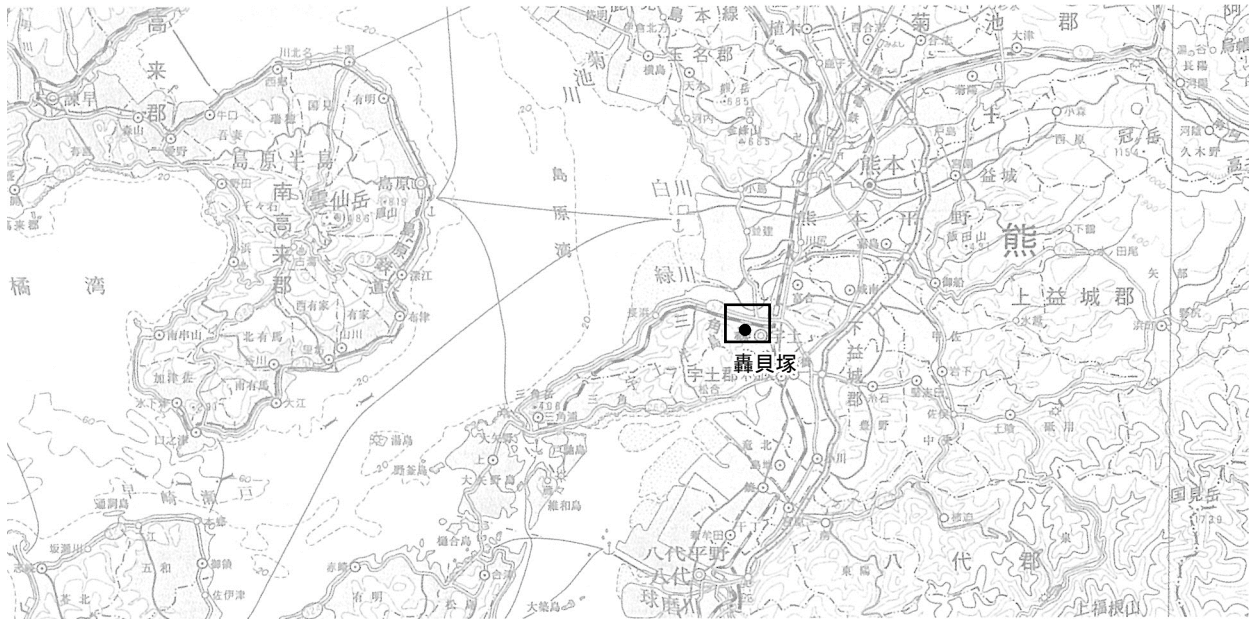
調査主体 宇土市教育委員会

調査責任者 宇土市教育長 木下博信(平成23～25年度)、浦川司(26年度)、太田耕幸(27年度～)

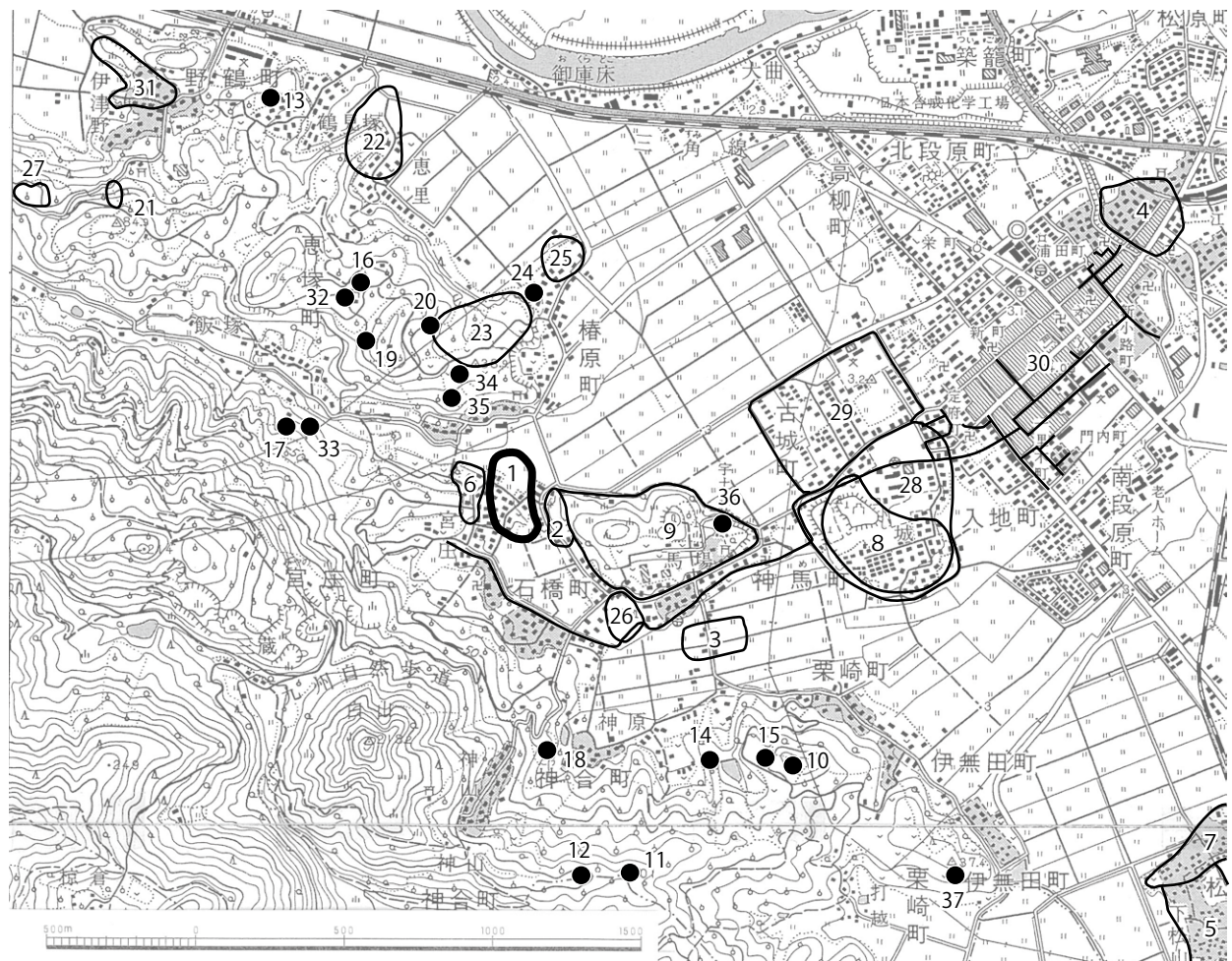
事務局 教育部長 山本桂樹(23～25年度)、前田保幸(26～28年度)、山本和彦（29年度）、
山本保廣（30年度）、宮田裕三（31〔令和元〕年度～）

文化課長 坂本純至(23・24年度)、木下洋介(25～27年度、28～29年度再任用職員)、
山本保廣(28年度)、前田保幸（28年度 教育部長兼務）、野田恵美（29～31
〔令和元〕年度）、池田和臣(28年度、令和2年度～)

文化(財)係 松田安代(係長：23年度)、船田元司(課長補佐兼係長：24年度)、赤澤憲治(係



第1図 轟貝塚の位置 (S=1/600,000)



- 1 轟貝塚 2 西岡台貝塚 3 馬場遺跡 4 石ノ瀬遺跡 5 北園遺跡 6 北平遺跡 7 下松山遺跡 8 城山遺跡
- 9 西岡台遺跡 10 城ノ越古墳 11 迫の上古墳 12 スリパチ山古墳 13 天神山古墳 14 神合古墳 15 猫ノ城古墳
- 16 東畑古墳 17 飯又古墳 18 山王平古墳 19 金嶽山古墳 20 椿原古墳 21 神ノ木山古墳群 22 恵里遺跡 23 椿原遺跡
- 24 宗福寺跡 25 宇土津 (推定地) 26 陳の前遺跡 27 伊津野遺跡 28 宇土城跡 (城山) 29 城山塩田遺跡 30 轟泉水道
- 31 野鶴貝塚 32 東畑2号墳 33 飯又2号墳 34 椿原貝塚 35 椿原石蓋土壇墓 36 西岡台箱式石棺 37 久保1・2号墳

第2図 轟貝塚周辺遺跡地図 (S=1/25,000)

第3節 遺跡の地理的環境

長：25～27年度），宮邊幸子（参事：23・25～28年度），稲崎憲一（参事：24年度），園田志穂里（参事：24年度），藤本貴仁（参事：23～27年度，係長：28年度～），九谷景子（参事：25～27年度），平田睦美（主事：23・24年度），後東彰子（主事：30・31〔令和元〕年度），大浪和弥（技師：28～31〔令和元〕年度，参事：令和2年度～），芥川博士（技師：23～30年度，参事：31〔令和元〕年度～）

※平成23年度の文化財係は，機構改革のため平成24年4月より文化係

調査指導

文化庁文化財部記念物課（平成30年度より文化財第二課），熊本県教育庁文化課

宇土市重要遺跡保存活用検討委員会 吉村豊雄（熊本大学名誉教授 日本史 平成24～29年度）
甲元眞之（熊本大学名誉教授 考古学 平成24～28年度）
渡邊一徳（熊本大学名誉教授 地質学 平成24年度～）
山尾敏孝（熊本大学名誉教授 土木史 平成24年度～）
山崎純男（元福岡市文化財部長 考古学 平成29年度～）
小畑弘己（熊本大学教授 考古学 平成24年度～）

協力機関及び調査指導・協力者

株式会社古環境研究所，九州縄文研究会，肥後考古学会，禰亙田佳男・水ノ江和同・近江俊秀・斉藤慶吏（文化庁記念物課，平成30年度より文化財第二課），村崎孝弘・長谷部善一・宮崎敬士・矢野裕介・池田朋生・能登原孝道・木村龍生・木庭真由子・豊永結花里（熊本県教育庁文化課），黒住耐二（千葉県立中央博物館），樋泉岳二（早稲田大学），高宮広土（鹿児島大学），松下孝幸・松下真実（NPO法人人類学研究機構），中村俊夫（名古屋大学年代測定総合研究センター），吉井秀夫（京都大学大学院文学研究科），中務真人（京都大学大学院理学研究科），村上由美子・横山操（京都大学総合博物館），分部哲秋（長崎医療技術専門学校），弦本敏行・佐伯和信（長崎大学医学部），海部陽介（東京大学総合研究博物館），濱口俊夫・吉田恒・根本なつめ・佐藤伸二・辻誠也，前川清一・高木恭二・橋本すま子（宇土市文化財保護審議会），島津義昭（元熊本県教育委員会），杉村彰一（元山鹿高校教諭），富田克敏（九州文化財研究所），西田巖（佐賀市教育委員会），廣重知樹（熊本大学学生）

発掘調査作業員

飯田孝一，内田博美，小畑律子，末鶴順次，中川道治，中村洋，中村正立，西村和子，橋本カズエ，橋本チエ子，東原遥希，平野泰彦，福田フミエ，藤浦義磨，古山節子，右田純輔，村山艶子，森実，余語政利，秦翔平・松浦正朋・竹村南洋（熊本大学学生），竹林香菜（明治大学学生）

整理・報告書作成作業員

上田友子，内田美和，江東出，中川ゆかり，中村マナミ，廣瀬恵子，山口陽子

第3節 遺跡の地理的環境（第1図）

熊本県西側中央から西方の有明海に向かって突出する宇土半島。その半島を構成する大岳火山系の山塊から東に派生する尾根の先端付近，標高6 m程度の舌状台地上に轟貝塚は所在する。西には標高218mの白山を間近に望み，対する東側には幅50m程の狭い低地を挟み，地元で西岡台と呼ばれる標高約40mの独立丘陵が存在する。北東方向には旧白川や緑川，その支流である浜戸川の堆積によってできた熊本平野が広がっており，貝塚がこの沖積平野の南西端部に位置することがわかる。貝塚の南側には，上記の丘陵や尾根に囲まれる限られた範囲に標高4 m程度の低地が存在し，貝塚と西岡台丘陵との間の低地を介してわずかに熊本平野

とつながっている。縄文時代の海進期には、この低地を介して貝塚南側まで海が入り込んだ可能性が高い。

貝塚の南西方向約200mには、環境省の日本名水百選に選定された湧水「轟水源」が存在する。大岳山地の降水が集まるこの湧水がいつから存在していたか定かではないが、縄文時代の人々がここに生活を営み、貝塚が形成されたひとつの要因として、縄文時代当時も付近に湧水が存在した可能性は十分に考えられる。

以上から縄文時代における轟貝塚の周辺環境を考えると、波穏やかで豊富な魚介類が生息する有明海とその入り江に面し、背後には宇土半島の山々と森林、湧水が存在する等、山海の豊富な資源に恵まれ、人の生活に適した環境だったことがうかがえる。

第4節 遺跡の歴史的環境

(1) 轟貝塚周辺の遺跡 (第2図)

第3節で述べた地理的環境を背景に、轟貝塚(1)周辺には縄文時代から歴史時代まで数多くの遺跡が残されている。縄文時代の遺跡としては、轟貝塚の東方約50mの至近距離にあり、前期から後期にかけての遺物とドングリ等堅果類の貯蔵穴が発見された西岡台貝塚(2)、曾畑式土器が出土した馬場遺跡(3)、その他、縄文時代の遺物を含む包蔵地である石ノ瀬遺跡(4)や北園遺跡(5)が挙げられる。また、直線距離で4km程度離れているが、縄文時代前期の曾畑式土器の標式遺跡として知られる曾畑貝塚(第34図40)も、轟貝塚と並んでこの地域の縄文時代前期を代表する遺跡として重要である。

続く弥生時代の遺跡として、中期の黒髪式の甕棺が出土した北平遺跡(6)、弥生時代後期の集落跡とみられる下松山遺跡(7)、そして前期～後期の拠点集落とみられる城山遺跡(8)がある。特に城山遺跡は、続く古墳時代において、付近に豪族居館と考えられる西岡台遺跡(9)が出現することとの関係が注目される。西岡台遺跡からは、舶載三角縁神獸鏡が出土した城ノ越古墳(10)や迫の上古墳(11)、スリバチ山古墳(12)等、同じく前期の築造とみられる前方後円墳を一望でき、豪族居館とその葬られた古墳とが一体的に把握できる例として全国的にも希少である。これら前期の首長墓系譜は中期以降には断絶し、やや離れた場所に単独で立地する天神山古墳(13)を除いては、付近に前方後円墳は築造されなくなる。前方後円墳以外では、前期の円墳とみられる神合古墳(14)や猫ノ城古墳(15)の他、横穴式石室を主体部に持ち後期から終末期にかけての築造とみられる東畑古墳(16)や仮又古墳(17)、山王平古墳(18)、金嶽山古墳(19)等の円墳、県内唯一の終末期方墳である椿原古墳(20)、多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群(21)等が存在する。その他、恵里遺跡(22)や椿原遺跡(23)といった、古墳時代の包蔵地も存在する。古墳時代に比べ古代の遺跡は少ないが、西岡台遺跡や城山遺跡で土器器・須恵器が出土し、西岡台遺跡では故意に破碎された土馬も出土している。

中世には、西岡台丘陵を利用して宇土氏・名和氏が居城とした宇土城跡(西岡台)(9)が築城された。これまでの発掘調査により、中心となる曲輪とその周囲で多数の掘立柱建物跡や堅堀・横堀跡、門跡等が検出され、特に横堀の一部が未完成である点や、廃城の際の儀礼的行為「城破り」とみられる痕跡の発見等が注目される。また、宇土城跡と関連する中世の遺跡として、中世の居館跡とみられる椿原遺跡、宇土城主・名和氏の菩提寺である曹洞宗福寺跡(24)がある。その付近、現在の椿原町宇船津周辺には、中世の港湾施設である「宇土津」(25)が存在したとみられている。また、陣の前遺跡(26)や伊津野遺跡(27)でも中世の土器・陶磁器が出土している。中世末期には、キリシタン大名として知られる小西行長により宇土城跡(城山)(28)が築城され、付近には家臣屋敷跡とみられる城山塩田遺跡(29)も残るが、関ヶ原の戦いで小西が敗れ処刑された後、肥後一円を支配した加藤清正によって改修された。それも近世初期には廃城となり、続いて宇土細川藩3万石の陣屋町が整備された。小西・加藤時代の城下町を踏襲しつつ、今も使われ続ける上水道「轟泉水道」(30)の敷設等を経て整備されたこの町並みが、現在の宇土市中心街の姿につながる。

(2) 宇土半島基部地域における縄文時代の貝塚について

熊本県内では計84箇所縄文時代の貝塚が確認されており(第3図, 熊本県教育委員会2005), 西日本有数の貝塚が密集する地域として知られる。中でも有明海東岸, 八代海東岸, 宇土半島先端から天草上島周辺, 天草下島北部に顕著に分布している。このうち, 天草下島北部の沖ノ原貝塚(75)・一尾貝塚(76)・大矢遺跡(77)のように, モリ・ヤス・結合釣針などを用いた外洋性の漁撈活動がうかがえるものを除けば, ほとんどの貝塚が, 遠浅でよく発達した干潟が広がる有明海や八代海(不知火海)の自然環境と海産資源を背景に形成されたものと考えられる。

有明海東岸地域は更に, 菊池川流域を中心とした県北部の群と, 宇土半島基部地域を中心とした県央の群とに細分でき, 轟貝塚(38)はこの宇土半島基部地域の群に属す(第4図)。周辺には, 轟貝塚の至近距離にあり密接な関係を持つとみられる宇土市西岡台貝塚(39), 曾畑式土器の標式遺跡として知られる同曾畑貝塚(40), 阿高式土器の標式遺跡である熊本市南區城南町(旧下益城郡城南町)の阿高貝塚(34), 同黒橋貝塚(33), 御領式土器の標式遺跡である同御領貝塚(35)等, 縄文時代前期から後期にかけての重要遺跡が点在する。古くから研究者の間で注目されてきた地域であり, 特に轟貝塚も含めて土器型式の標式遺跡が多い点は, 九州における縄文土器編年の黎明期, その礎を築いたといえる小林久雄らがこの地域を主たる研究フィールドとしていたことに起因する。

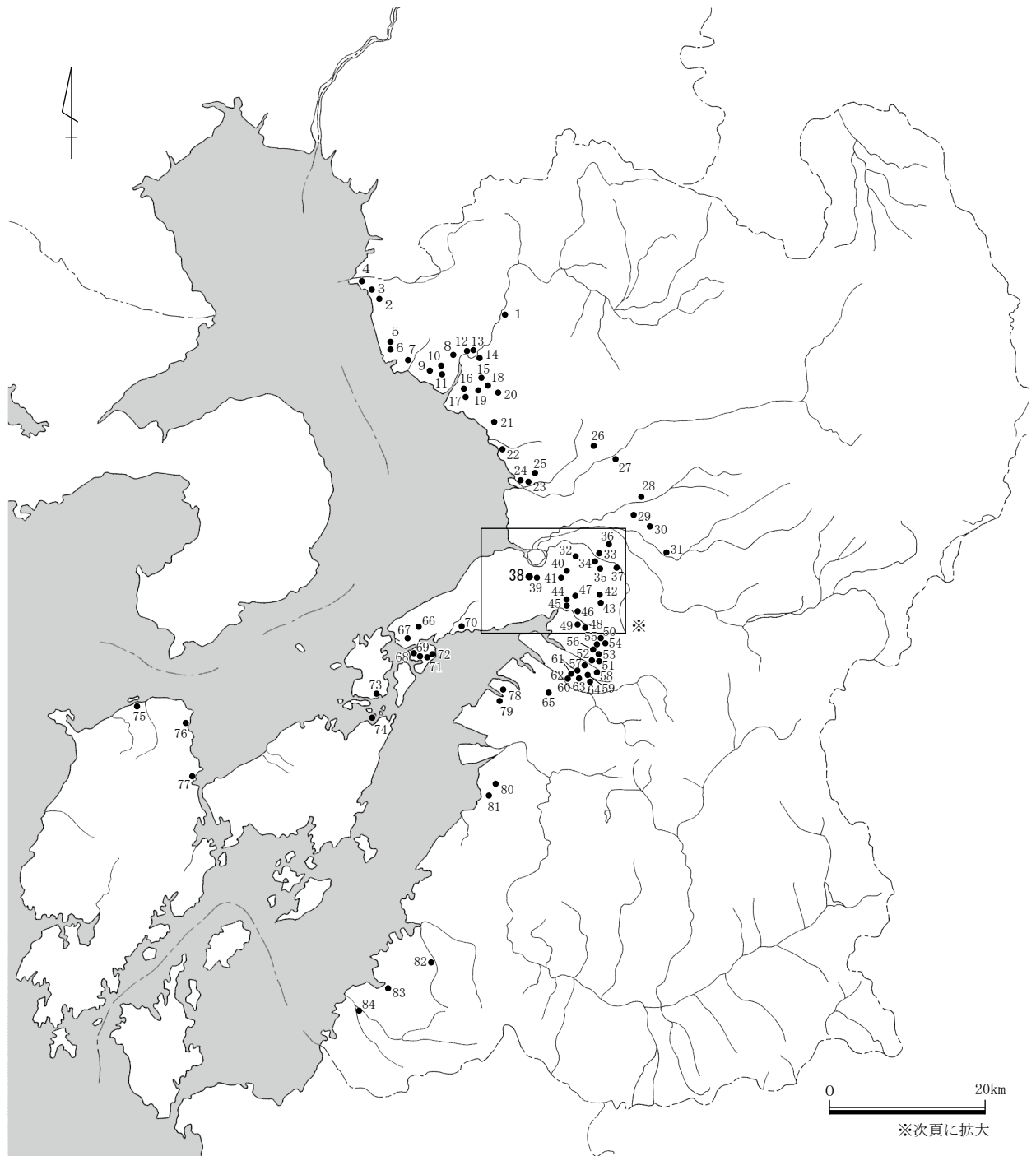
轟貝塚の東方100m足らずの場所に存在する西岡台貝塚は, 轟式・曾畑式等の前期の土器から, 出水式等の後期の土器まで, 幅広い時期の遺物が出土した他, 標高2.5m程度の低地部で湧水層に掘り込んだ貯蔵穴が検出された(宇土市教育委員会1985)。遺跡の形成時期が轟貝塚と併行するのか, あるいは互いに空白期を補うような関係にあるのかは今後の研究課題だが, いずれにせよ轟貝塚の範囲や変遷を語る上で欠かせない重要な遺跡である。

轟貝塚の東約4kmに位置する曾畑貝塚は, 熊本平野南端部に位置する木原山(通称:雁回山)の南西麓の台地上に位置し, 明治期から多くの研究者が訪れている。明治23(1890)年には若林勝邦, 大正12(1923)年には清野謙次による発掘調査が行われ, その後も昭和34(1959)年に慶應義塾大学, 昭和61・62(1986・87)年に熊本県教育委員会による発掘調査と, これまでに多くの調査が行われている。その結果, 曾畑貝塚には曾畑式土器を含む前期の貝層と, 鐘崎式等を含む後期の貝層の少なくとも2種類が存在することが判明した(宇土市教育委員会2011)。また, 貝塚南西部の低湿地では貝層出土のものよりやや古いとみられる曾畑式土器を伴う貯蔵穴群の存在が確認された(熊本県教育委員会1988)。

曾畑貝塚から木原山を挟んだ反対側, 木原山北側の山麓には阿高貝塚・黒橋貝塚・御領貝塚が存在する。大正期から知られていた阿高貝塚と昭和47(1972)年の豪雨に伴って発見された黒橋貝塚とは, 現在の浜戸川を挟んだ対岸に位置し, 形成時期をほぼ同じくすることから, 一連の遺跡と考えられる(熊本県教育委員会1998・2005)。これまでの発掘調査によって, 貝層の形成時期は縄文時代中期末~後期前半と推定される。

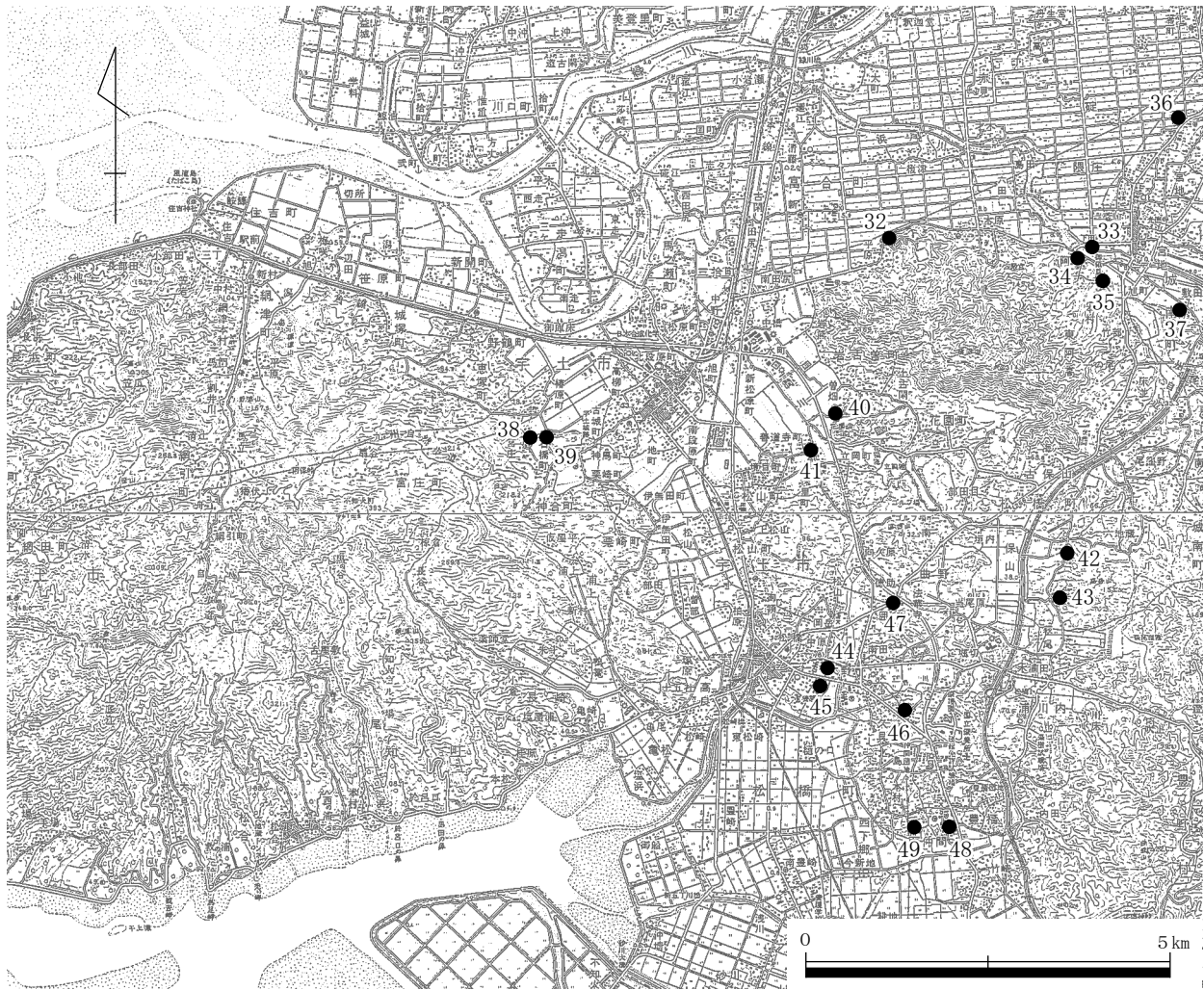
これに対し, 阿高貝塚の南約300mに位置する御領貝塚は, 縄文時代後期末~晩期初頭とみられ, 貝層の厚さが2mを越える大規模貝塚である。堆積する貝のほとんどが淡水産のヤマトシジミである点が特筆される。これに関して, 小林久雄は鹹水産のマガキを主体とする阿高貝塚と, 淡水産のヤマトシジミを主体とする御領貝塚との違いを, 海進海退現象に伴う周辺の環境変化によるものとし, 両者の時期差を考える根拠とした(小林1931)。

その他, 宇土半島基部地域の南部にも, 過去に鳥居龍蔵や清野謙次らが調査を行った宇城市松橋町大野貝塚や, 曾畑式土器の下層から轟式土器が出土し, 両者の新旧関係が層位的に確認された同宮島貝塚など, 学史的・学術的に貴重な貝塚が分布している。



- | | | | | | |
|-------------|-----------|-----------|--------------|--------------|-------------|
| 1 若園貝塚 | 2 宮内貝塚 | 3 境崎貝塚 | 4 四山貝塚 | 5 堀崎貝塚A | 6 堀崎貝塚B |
| 7 腹赤貝塚 | 8 尾崎貝塚 | 9 浜田貝塚 | 10 庄司(貝島)貝塚 | 11 古閑原貝塚 | 12 繁根木貝塚 |
| 13 保田木貝塚 | 14 桃田貝塚 | 15 片諏訪貝塚 | 16 ピナワラ貝塚 | 17 キャアガラワラ貝塚 | 18 竹崎貝塚 |
| 19 久島貝塚 | 20 尾田貝塚 | 21 湯の浦貝塚 | 22 中川内平(平)貝塚 | 23 北内潟貝塚 | 24 千金甲菖蒲谷貝塚 |
| 25 川戸貝塚 | 26 打越貝塚 | 27 渡鹿貝塚 | 28 沼山津貝塚 | 29 カキワラ貝塚 | 30 甘木貝塚 |
| 31 辺田見貝塚 | 32 ソビエ石貝塚 | 33 黒橋貝塚 | 34 阿高貝塚 | 35 御領貝塚 | 36 今村貝塚 |
| 37 敷田貝塚 | 38 轟貝塚 | 39 西岡台貝塚 | 40 曾畑貝塚 | 41 古保里貝塚 | 42 北萩尾貝塚A |
| 43 北萩尾貝塚B | 44 松橋大野貝塚 | 45 松橋貝塚 | 46 上久貝塚 | 47 曲野貝塚 | 48 仲間貝塚 |
| 49 宮島貝塚 | 50 年の神貝塚 | 51 瀬戸貝塚 | 52 セツ江カキワラ貝塚 | 53 竹ノ下貝塚 | 54 中小野貝塚 |
| 55 引地貝塚 | 56 大坪貝塚 | 57 四ツ江貝塚 | 58 土穴瀬貝塚 | 59 段貝塚 | 60 大野貝塚 |
| 61 赤迫A貝塚 | 62 赤迫B貝塚 | 63 西平貝塚 | 64 大瀬田貝塚 | 65 有佐貝塚 | 66 洲の上貝塚 |
| 67 際崎貝塚 | 68 小崎貝塚 | 69 辺田貝塚 | 70 西木の浦貝塚 | 71 道の峯貝塚 | 72 浜の洲貝塚 |
| 73 柳貝塚 | 74 前島貝塚 | 75 沖ノ原貝塚 | 76 一尾貝塚 | 77 大矢遺跡 | 78 産島貝塚 |
| 79 郡築十二番町遺跡 | 80 五反田貝塚 | 81 田ノ川内貝塚 | 82 橋本貝塚 | 83 浜崎貝塚 | 84 南福寺貝塚 |

第3図 熊本県縄文時代貝塚分布図 (S=1/800,000 熊本県教育委員会 2005 を一部改変)



第4図 宇土半島基部地域の縄文時代貝塚 (S=1/100,000)

このように、宇土半島基部とその周辺地域は、古くから多くの調査が行われ、その結果として轟式・曾畑式・阿高式・御領式といった縄文時代前期～後期の土器の諸型式が設定される等、学史的に非常に重要な地域といえる。平成期以降の開発行為等に伴う調査成果も併せて、九州の縄文文化を語る上で欠くことができない貝塚が分布する地域と言って差し支えない。

宇土半島基部地域の北側に広がる熊本平野周辺では、曾畑式土器が出土した上益城郡嘉島町カキワラ貝塚(29)や、阿高式土器が出土した熊本市渡鹿貝塚(27)等、10個所の貝塚が確認されている。また、宇土半島基部地域の南側、氷川が貫流する八代平野北部には、明治12(1879)年にE. S. モースによって発掘調査が行われた八代郡氷川町の大野貝塚(60)や、中～後期に形成されたとみられる八代市鏡町の有佐貝塚(65)等、16個所の貝塚が確認されている。

以上、熊本平野から宇土半島基部地域、八代平野北部にかけては、県内のおよそ半数にのぼる多数の貝塚が分布している。前述のとおり、これらは有明海・八代海沿岸の豊富な海産資源を背景に形成されたとみられ、その分布は縄文海進期の海岸線を推定する根拠資料にもなる。九州や西日本における縄文時代研究において、欠くことのできない重要な地域であるといえる。